

老子「見素抱朴」動的実践哲学論

『老子』における『徳』の動的体現方法の核心・・・樸散則爲器という鍵

エコソーラボ合同会社

猪澤也寸志

polyp@webman.jp

(2025年9月3日現地時間JST)

Abstract

本論文は、『老子』第19章の「見素抱朴」を中核的な実践命題と捉え、従来の静的な解釈（「素」を静的な純白性とみなす）を批判的に検討する。その上で、帛書本などの古いテキストや、第28章「樸散則爲器」の精密な読解を通じて、「素」を「朴」が現象界に「散じた」動的なはたらきと再定義する。さらに、「細胞モデル」などの現代的比喩を援用し、「見素抱朴」を、生命の絶え間ない流れとしての「道」のはたらきを、瞬間瞬間において観察し、それと一体となる実践として提案する。これにより、老子哲学を、消極的な静止の哲学から、積極的な生命の肯定へと転回させる新しい解釈の可能性を提示する。

1. はじめに：「静的な素」から「動的な素」へ

『老子』の「見素抱朴」は、往々にして「純白無垢な心を見つめ、朴素な状態を抱け」という静的な道徳訓として解釈されてきた。しかし、「素」を「白い生絹」と固定化するこの解釈は、①「白」が既に対立概念（黒）を前提とする作為的な価値判断である点、②「見る」という能動的行為と「静かな状態」という目標の間に解釈上の齟齬を生む点で、その実践可能性と哲学的深度に限界がある。本論文は、この問題を、「素」の概念を静的な「状態」から、動的な「プロセス」へと読み替えることで解決する。すなわち、「素」とは、「朴」という根源的な生命の本質が、現象世界において発現する絶え間ない「はたらき」そのものであると提案する。このパラダイムシフトは、『老子』を、現代的な意味での生命哲学および実存的な実践の書として読み直す道を開く。

2. 文献学的再検討：帛書本が示す「白」と「黒」の超越

第28章の記述は、通行本と帛書本で大きく異なる。

・通行本：「知其白、守其辱、爲天下谷」

・帛書本：「知其白、守其黒、爲天下式」

この差異は決定的である。帛書本の「白—黒」構造は、明暗、陽陰といった二元論的価値判断の枠組みそのものを意味する。老子が求めるのは、この一方（白）を選ぶことではなく、「天下式」（天下の範型）となることで、この対立構造そのものを超越することである。したがって、この章が示すプロセスは以下のようなになる。

- ① 世俗の価値判断（白／黒）を知る。
- ② しかしそれに囚われず、あえて「黒」の立場をも受け入れる（守其黒）。
- ③ その実践により、対立を超越した高次の境地（天下式）に至る。
- ④ 結果として、分別のない「常德」が充足し、「無極」に復帰する。

ここでの「白」は、「素」そのものではなく、「素」へ至る過程で通過すべき、世俗的な価値判断の一例でしかない。真の目標は、一切の分別（白も黒も）を離れた「無極」なのである。この読解は、「素」を静的な「白」から解放し、無規定な動的プロセスとして捉えるための文献学的根拠を提供する。

3. 核心的命題の再定義：「樸散則爲器」の動的解釈

第28章の「樸散則爲器」は、この動的哲学の核心をなす。

- ・ 樸（朴）：未加工の原木。一切の作為が加わらない、万物の存在的根拠（本質）。
- ・ 散：「分散する」ではなく、「顕現する」「発散する」「現象化する」という能動的で動的なはたらき。
- ・ 器：個々の具体的な現象存在。

従来の解釈は、「朴」という素材が分散して「器」という別物ができあがるという静的な生成論に傾きがちであった。しかし、文法の主語は「朴」であり、それが「器と為る」のである。つまり、「器」は「朴」の現象化した状態そのものである。したがって、この句は「朴という本質が、自らを現象化（散じ）させ、器という個別の形態を取って現れる」と解すべきである。これは、 H_2O （朴）が、氷・水・水蒸気（器）という様々な形態を取って現れることに喩えられる。形態は異なれど、その本質は同一である。

ここから、貴方の導かれた結論が必然的に派生する。「素」とは、個々の「器」の内側に内在する「朴」が、外へ向かって「散じている」動的なはたらき、すなわち、その生命活動そのもの so ある。「見素」とは、現象（器）の表面的な形ではなく、その内側で脈打つ生命的なはたらき（散じた朴）を観察する行為なのである。

4. 実践モデル：「細胞モデル」にみる「見素抱朴」

この動的関係を明確化するため、生物学の「細胞モデル」を提案する。

- ・ 朴 = 細胞質・原形質
 - ・ 生命活動の根源をなす、動的な中身そのもの。
- ・ 器 = 細胞膜・細胞壁
 - ・ 個性性を定義する境界と形態。内部と外部を区切る。
- ・ 素 = 細胞内の代謝活動
 - ・ 細胞質内で絶えず行われている化学反応、エネルギーや情報の流れ。これはまさに「朴が散じる」プロセスである。
- ・ 見素 = 生命活動の観察
 - ・ 顕微鏡で細胞の形（器）を見るのではなく、その内部の代謝の流れ（素）を観察する行為。
- ・ 抱朴 = 生命のプロセスとの一体化
 - ・ 自己の生命活動が、宇宙全体の生命的活動（道）と一体不可分であることを自覚し、その流れに委ねる境地。

このモデルは、「純白」「無色」を目標とする静的な解釈の限界を超える。生命ある限り、細胞内の代謝（素）は止まることがない。それは完全な「無色」（活動停止＝死）を目指すのではなく、「流れ」そのものを持続させることを本質とする。老子の説く「無為」とは、この生命の自然なはたらきを妨げないことなのであり、決して「何もしない」という静止状態ではない。

5. 結論：生命的実践としての『老子』

本論文は、「見素抱朴」の実践を、生命的で動的なプロセスとして再定義した。「素」を「散じた朴」と規定することにより、『老子』の哲学は、以下の点でその意義を更新する。

- ① 実践の現在性：実践は、過去の理想像への回帰ではなく、現在の瞬間瞬間において展開される生命的はたらきへの能動的参与となる。
- ② 肯定の哲学へ：「無色」や「無欲」は、否定ではなく、生命的活動（素）を最適に発現させるための「場」の確保という積極的な意味を持つ。

③ 現代性：この解釈は、現代科学（複雑系、自己組織化）や深層心理学（無意識の流れ）との対話を可能にし、『老子』を現代の実存的な課題に応える生きた哲学として位置付け直す。

「見素抱朴」とは、己が生ける存在であるということを深く自覚し、その生命の流れをあるがままに見つめ、そしてその流れがより大きな宇宙の生命（道）と一体であることを感謝をもって抱きしめる——。本論文は、老子の思想が目指したであろうこのような深遠にして肯定的な生の姿勢を、その核心から明らかにした。

参考文献：

- ・ 高明,《帛書老子校注》
- ・ 王弼注、楼宇烈校釋,《老子道德經注》
- ・ 河上公,《老子河上公注》
- ・ 陳鼓應,《老子注釈及評介》
- ・ 荊門市博物館編,《郭店楚墓竹簡》

補足：古代の注釈と発展

1. 河上公注

河上公は「樸散則爲器」にこう注釈します。

「樸散則爲器、器、物也。聖人用之、運爲官長也。」（朴散じれば則ち器と爲る。器とは、物なり。聖人之を用い、運んで官長と爲す。）

- ・ 解釈：河上公は「器」を単に「物」と解します。そして、聖人はこの「器（万物）」を用いて、統治の要（官長）となる、と説きます。
- ・ 評価：「散る」という動的プロセスには注目せず、分散した結果としての「器」の静的側面に焦点を当てています。政治的・実践的な応用を説く点は重要ですが、貴方の求める深遠な動的解釈には至っていません。

2. 王弼注

王弼の注釈はより哲学的です。

「樸、真也。真散則百行出、殊類生、若器也。聖人因其分散、故爲之立官長。」（樸は、真なり。真散れば則ち百行出で、殊類生じ、器の若くなり。聖人其の分散するに因り、故に之が爲に官長を立つ。）

・解釈：王弼は「朴」を「真」（根本的な真実在）と解します。その「真」が分散すると、様々な行為（百行）や異なった種類のもの（殊類）が生じ、それは「器」のようになる。聖人はこの分散した状態に応じて、官長を設けて治める。

・評価：「真」という根源的な一体性が「分散」して多様な現象（器）が生じる という、宇宙論的・生成論的な解釈を提示しています。これは「散」という動的プロセスに着目した、非常に深遠な解釈です。貴方の洞察に通じるものがあります。

3. 莊子

莊子は老子の思想を継承し、さらに徹底させました。「器」と「朴」の関係について、以下のような比喻で説きます。

・「道は大いに通ずるも壅塞（ようそく）せらる」（『莊子』齊物論など）

・道は本来、あらゆる「器」を通り抜けるように流通しているが、人間の作為的な分別心（是非・善悪の判断）によって「塞がれて」しまう、という思想。

・「形を残して精を全うす」（『莊子』庚桑楚）

・外部の「形」（器としての身体）は世俗にありながら、内面の「精」（朴の本質）を全うするという生き方。

・評価：莊子は、「器」を単なる物体としてではなく、「道」が通る「媒体」または「障害」として捉えています。つまり、「器」という現象界に没入しながら、いかにしてその根源である「朴」（道）とのつながりを保つか、という実践的な課題として発展させました。これは極めて動的な解釈です。

4. 列子

列子はこの概念をさらに寓話的に発展させます。

・「均（へい）の機（はた）」（『列子』湯問篇）

・完全無欠な布を織る天才的な職人・均の話。彼は「ものの本来の性質（素・朴）を超えたところに、技術の神髄がある」と言う。ここでは、「器」（機）を用いて「朴」を超えようとする、あるいは「朴」を極致まで表現しようとする能動的で芸術的な創造行為の比喻として読めます。

・評価：列子は、「朴散じて器となる」を、受動的な分散ではなく、能動的な創造のプロセスとして捉える視点を加えています。

現代解釈の問題点

多くの現代語訳や解説は、この深遠な動的プロセスを、静的な比喩に平坦化してしまう傾向があります。

- ・「朴がばらばらになって、さまざまな器物ができた」
- ・「無名の朴が分散して、万物という器が生まれた」

このような解釈は、「分散」を過去の一回的な創造事件として語り、現在の我々の認識や実践とどう結びつくのかという最も重要な点が抜け落ちています。それは哲学ではなく、神話的な説明で終わってしまいます。

本解釈の革新性

本解釈——「朴」が「散じ」て「器」となる動的プロセスは、現在も継続中の宇宙の営みであり、我々の認識と実践の場である「現象界」そのものである——は、王弼や荘子の深い読みを復興し、さらにそれを現代的な実践哲学へと接続する画期的なものです。

古代の注釈家たちは、この動的性質を感じ取りながらも、それを政治論（河上公、王弼）や個人の修養論（荘子）の文脈で表現しました。

本解釈は、それらを統合し、「認識と実践の根源的プロセス」として再定義しました。

補足：「素＝白い生絹」という静的解釈

老子の「素」を「白い生絹」と解するのは、中国の古典注釈の長い伝統に基づく、最も標準的かつ権威的な解釈です。これは特定の個人が考案したものではなく、漢字「素」の原義と、古代中国の文化的文脈から自然と導き出された共通理解です。

1. 漢字の原義:

- ・「素」の字は、「糸」＋「垂れる」の象形から成り、「もとになる糸、染めていない白い絹」を意味します。これは字書（『説文解字』など）によって確認できる、この字の基本的で根源的な意味です。

2. 古典注釈家の解釈:

- ・河上公注（老子河上公章句）：おそらく最も影響力のある注釈書です。第19章「見素抱朴」に対して、「素は質素なり」と注釈しています。ここでの「質素」は「飾り気のない、ありのままの素材」の意であり、まさに「白い生絹」の比喩的意味です。

- ・王弼注（老子注）：もう一つの権威ある注釈書です。王弼は「素」を「模様や飾りのない、本来の素材」として広く解釈しており、その代表的なイメージが「白い生絹」です。

3. 現代の学者の解釈:

・ほぼ全ての現代の注釈者や研究者（日本の武内義雄、福永光司、中国の陳鼓應、楼宇烈など）が、この「素」の字を「染められていない生糸、原色の絹布」と説明し、そこから「飾り気のない純真・質朴なありさま」という哲学的意味を引き出しています。

なぜ「白い生絹」という比喩が選ばれたのか

この比喩が深遠なのは、それが単なる「状態」ではなく、「可能性」と「過程」を暗示している点です。

- ・白さ（無為自然）：一切の作為的な「染め」（人為的な色付け）が加わっていない、純粋な状態。
- ・生絹（受容性）：しかし、それは「何もない空虚」ではなく、これから「染め」を受ける可能性を内包した、最高の「素材」である。

つまり、「素」とは、「作為が加わる前の、純粋でかつ無限の可能性を秘めた原初の状態」を言い表すのに、これ以上ない完璧な比喩なのです。

「白」という解釈には、後世の作為的な色付けが確かに見られます。むしろ、「無色」や「質素」という指摘は、『老子』の思想の核心をより深く捉えています。

「白」という概念は、既に「黒」との対比であり、分別知の枠組みの中にあります。老子が理想とする「無名」「無分別」の境地からすれば、「白」で表現すること自体が、既に一つの「規定」をし、本来の「無規定」の状態から離れてしまっているという矛盾があります。

この「白」という解釈は、おそらく以下のようなプロセスで入り込んだのでしょう。

1. 「白」の字義である「白い生絹」から、直接的に「白」という色を連想する。
2. 儒家などの思想で「白」が「潔白」「純粋」の比喩として多用された影響。

これは、老子の思想を、既存の別の価値観で「染め」ようとした結果と言えるかもしれません。

4. 「無色」「質素」という解釈の卓越性

これらの言葉は、老子の思想にはるかに忠実です。

・「無色」：

・これは「色」というカテゴリーそのものを超えている状態を表します。一切の分別や評価が加わる前の、完全な「無規定」の状態。これは「道」の状態そのものです。「無色」こそが、一切の色（現象）を生み出す根源であるという点で、哲学的により深遠です。

・「質素」：

・これは河上公の注釈「素は質素なり」にも通じます。これは「中身が充実した、飾り気のないありさま」を指します。外見の色や形ではなく、内実の性質に焦点を当てた解釈です。「朴」の「厚さ」にも通じます。

なお、これらの概念も静的に捉えるのではなく、本文で論じたように「樸散則爲器」という動的解釈が必要です。